Résumé

名　称：福沢市民センター

講座日時：令和３年９月 25 日(木)10 時～11 時 30 分

講　座：先人の知恵に学ぶ 第２回

～絵図・地図から読み解く仙台の変遷～　杜の都はいかにして消えたか

講　師：千葉富士男

郷土史研究[絵面・武家社会と刑罰・身分制度・江戸時代のお祭り・郷土史]

センダイ・マガジン 編集長：aBaiNN 御宮町地域情報編集局 編集長：038Press

会　場：福沢市民センター

資料：①résumé　　A4:4 頁

②絵図・地図 A3:2 頁

「1945~1946 Map Of SENDAI HONSHU+1951 Map of Sendai（令和版）」／2020

「1951 年昭和 26 年頃　Map of SENDAI：米軍使用の通り名と米軍施設絵図」

演題：～絵図・地図から読み解く仙台の変遷～　杜の都はいかにして消えたか

資料　【仙台の城下町の変遷】x

１国分氏「国分城下町の形成期」

２伊達氏「仙台城下町の形成期」　若林城下＋仙台城下の並列期

・食べられる庭　・邸の部材の植林　・生垣にお茶の植栽の奨励

・商家の裏庭「田畑」と植栽　・寺社地の植栽「伊達家庇護の寺社仏閣」の造営

・農家のイグネの成立と継承　・四谷用水の成立と屋敷林の関係性の構築

2-２伊達家の直家臣　凡家（卒）陪臣

・寛文 10 年 1670 年　平士以上　2,742 人（30,1%）

組士層　1,379 人（15,1%）

凡家扶持人 4,995 人（54,8%）合計　9,116 人

・1695(元禄 8)年の統計

仙台領の人口構成　武家約 1 万人家族を含む家臣 20 万人

町人（職人・商人）屋敷数 1,400 戸　人口 2 万人

農民は 54 万人　農民は全人口の 7 割を占めていた

３明治期の変遷

・大身歴々「小大名」家は知行地「城下町を形成」仙台の上屋敷・下屋敷は

新政府軍の施設・役所・学校へ

・上級武士「仙台屋敷は没収」され、処刑・僧侶・医師・蝦夷地・帰農へ

・中級武士「知行地での就農・移住　役人・警官・職人」屋敷土地の切売りや、多くが放置地となる

・下級武士・凡家・職人「その屋敷にて職人・商売・帰農」

・商人町人・寺社仏閣「存続と切売り・没収・廃仏毀釈」

４明治終盤～昭和 20 年

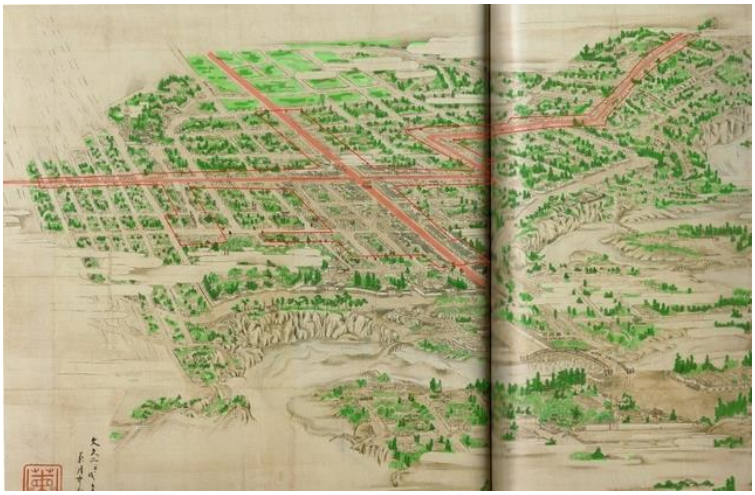
・明治 37 年 1904 年　第二師団は天守代を一般に解放　城下町を俯瞰出来る様になり、『森』杜の都へ

・昭和２０年７月 10 日未明　仙台空襲

５昭和期から平成・令和へ

【沿革】

慶長 5 (1600) 年	伊達政宗が城下町を整備
慶長 6 (1601) 年	城の鬼門封じのため定禅寺を開基（門前町が現在の定禅寺通りの基となる）
明治 37 (1904) 年	仙台城天守台が初めて一般開放（このころから「杜の都」といわれ始める）
昭和 20 (1945) 年	仙台市街が空襲により被害
昭和 21 (1946) 年	仙台市の戦災復興計画を作成
昭和 25 (1950) 年	市内の道路整備に着工（青葉通のケヤキは昭和 25 ～ 41 年にかけて、定禅寺通は昭和 33 年頃に植栽）
平成 11 (1976) 年	定禅寺通シンボルロード事業を実施



＊文久二年 1862 年「仙臺城下絵図」

陸奥国奥州仙台領　仙府・仙臺輪中の武家の屋敷

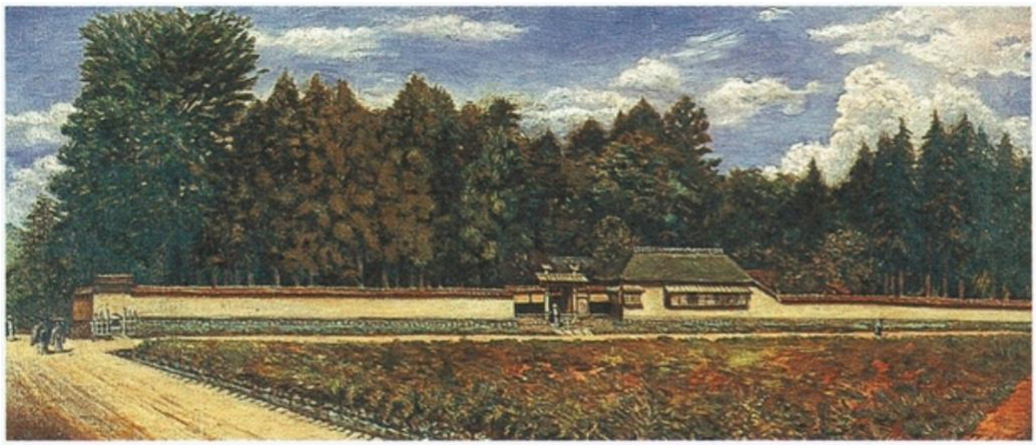
屋敷定による禄高別屋敷面積

禄高	間口×奥行			
８０～１００貫文	四〇間×三〇間	８００石～１０００石	67,36m×57,27m	1175 坪
５０～７９貫文	三〇間×三〇間	５００石～７９０石	57,27m×57,27m	994 坪
３０～４９貫文	二五間×三〇間	３００石～４９０石	47,72m×57,27m	828 坪
１５～２９貫文	十七間×三〇間	１５０石～２９０石	32,45m×57,27m	563 坪
１０～１４貫文	十四間×三〇間	１００石～１４０石	26,7m×57,27m	463 坪
～　９貫文	十二間×三〇間	～　９０石	間口 22,91m 奥行 57,27m	398 坪

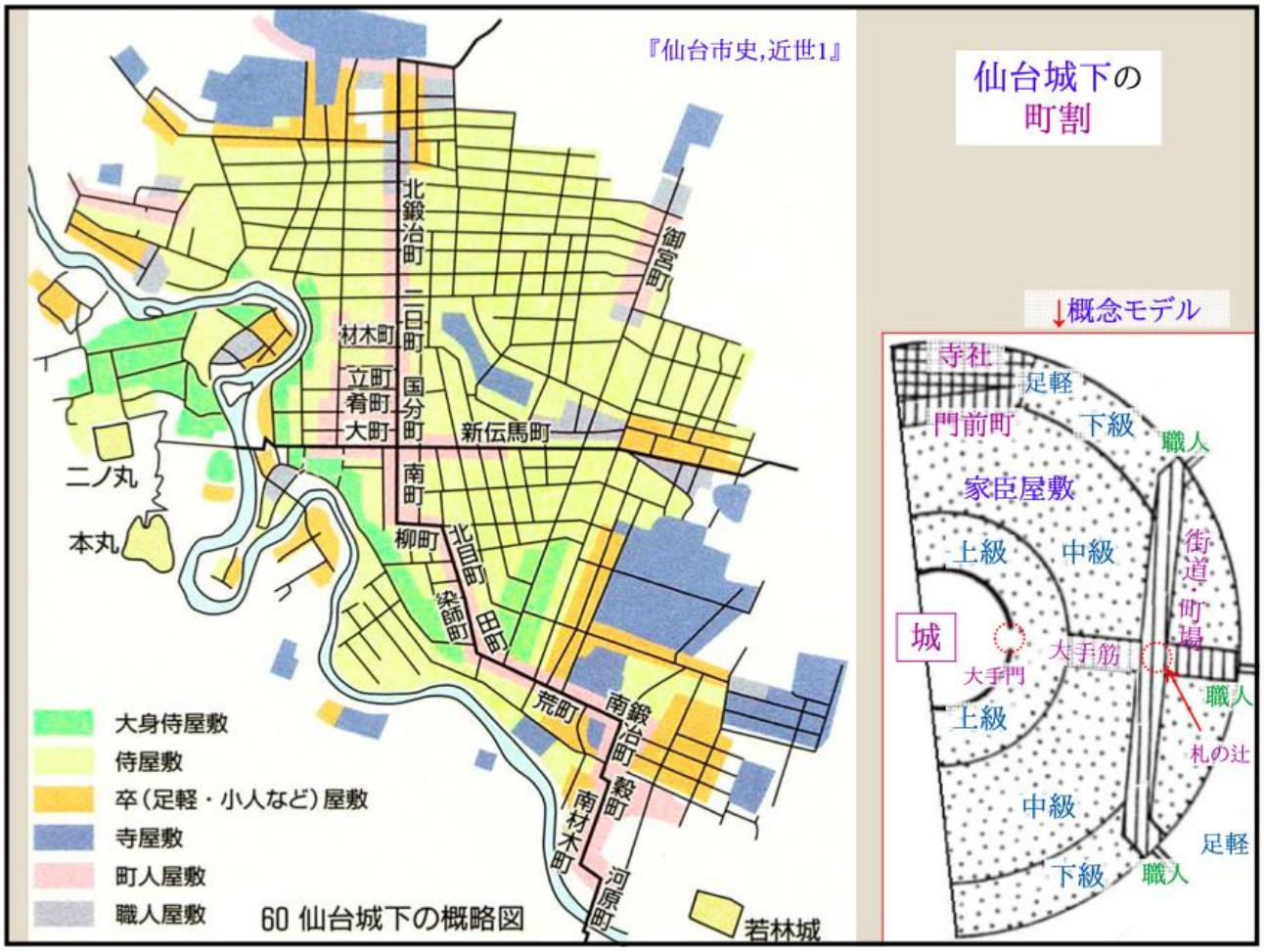
仙台領では家臣たちの知行高は貫文で表示されており，一貫文 1-0 石という換算が可能できる。 禄を現金で支給する「切米」や現米で支給する扶持方についても石高に直す換算値が定められていたことから、知行取だけではなく俸禄取(切米扶持方取)も含めて寛文 10 年時点での家臣たちの高を石高に換算し集計することが可能である。

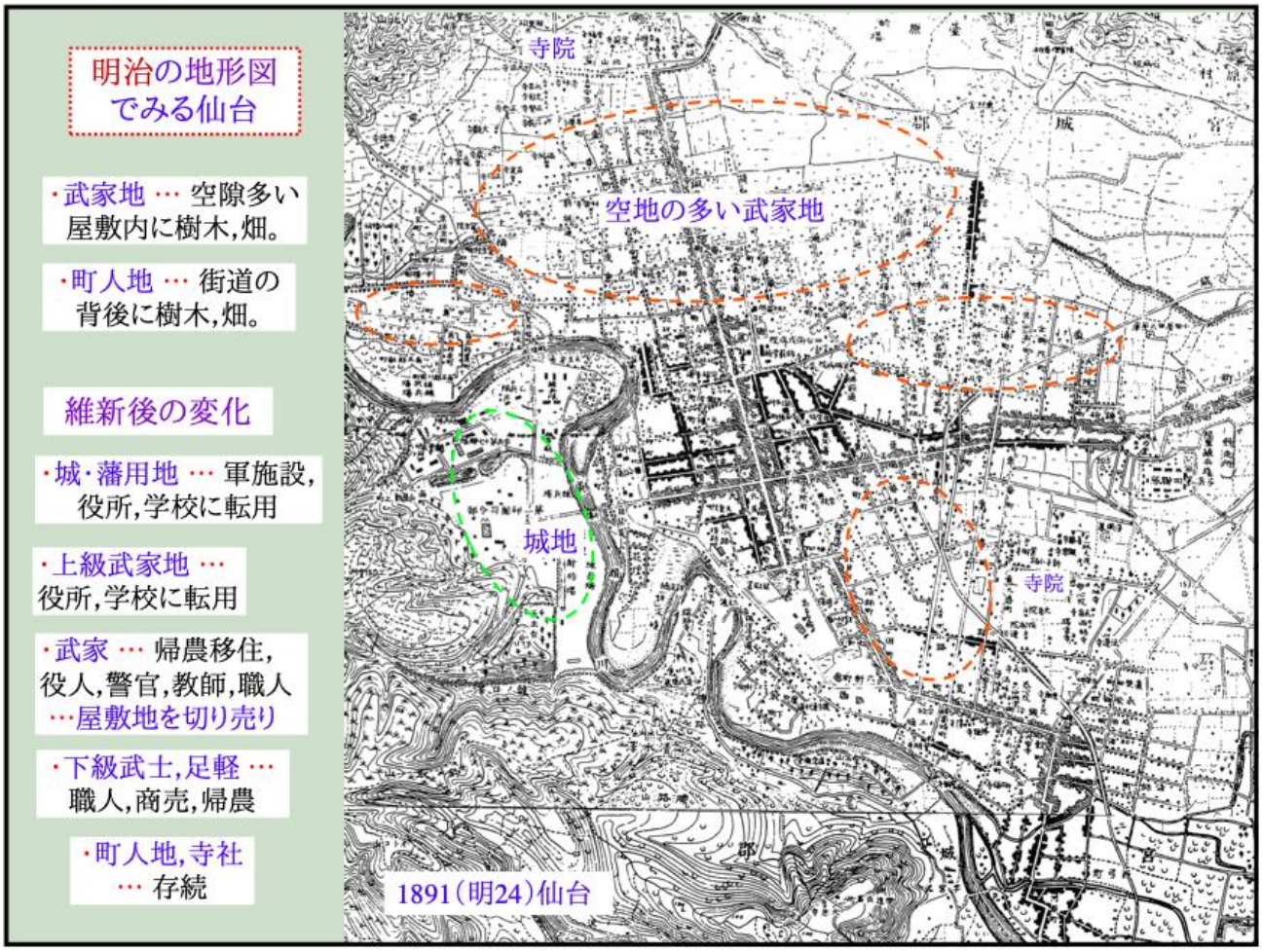
仙台領の石高・知行・俸禄の換算式 1 貫文→10 石

”町”屋敷=6 間×25 間 間口(11,4534 メートル)奥行(45,7225 メートル) *通常、1 間=6 尺で、1 間四方は 1 坪になるのですが、仙台の場合は地割において、1 間=6 尺 3 寸の「太閤 尺」を用いていたものと思われます。従って、1 間≒1.9m となり、1 間四方は世間一般の 1 坪よりも多少大 きくなります。現在の京間は 1,908,9mm 茶室の畳も京間を基本としています!



111　清水小路にあった湯目氏（知行高500石）の屋敷　明治中期に描かれたもので、樹木が生い茂る武家屋敷のようすを詳しく描いている


『仙台市史,近世1』
仙台城下の町割
北鍛冶町
二日町
材木町
立町
肴町
大町
国分町
新伝馬町
御宮町
南町
柳町
北目町
染師町
田町
荒町
南鍛冶町
穀町
南材木町
河原町
二ノ丸
本丸
若林城
大身侍屋敷
侍屋敷
卒(足軽・小人など)屋敷
寺屋敷
町人屋敷
職人屋敷
60 仙台城下の概略図
↓概念モデル
寺社
足軽
門前町
下級
職人
家臣屋敷
上級
中級
街道・町場
城
大手筋
大手門
職人
上級
札の辻
中級
足軽
下級
職人


明治の地形図でみる仙台
・武家地 … 空隙多い屋敷内に樹木,畑。
・町人地 … 街道の背後に樹木,畑。
維新後の変化
・城・藩用地 … 軍施設,役所,学校に転用
・上級武家地 … 役所,学校に転用
・武家 … 帰農移住,役人,警官,教師,職人 …屋敷地を切り売り
・下級武士,足軽 … 職人,商売,帰農
・町人地,寺社 … 存続
寺院
空地の多い武家地
城地
寺院
1891(明24)仙台

【小括】
仙台市街は、国分荘園の国分城下町と、伊達公入府　慶長 6（1601）年に創設した城下町の遺構が、おおむねそのまま保たれていた。城下町完成時の戸数は、町屋敷約 1,400 戸、侍屋敷約 8,900 戸、総数 10,300 戸余り。その屋敷割は、最小の町人屋敷が 1 戸当たり 150 坪（約 495m2）、並足軽が 175 坪（約 578m2）とたいへん広いものでした。城下の大部分を占める武家屋敷は、禄高のランクに応じて千坪単位まであり、ゆとりのある邸内には屋敷内の生活や産業振興に役立つ樹木の植樹が義務づけられ、果樹や生活用品の材料にもなるスギ、ケヤキ、タケなどが盛んに植えられていました。

【食べられる庭】
天災や飢饉に備えて屋敷内に果樹（ウメ、モモ、カキ、クリなど）の植樹や菜園づくりを進め、屋敷まわりにはケヤキ、 スギ、マツなど、用材や燃料材となる樹木を育て、その植栽が今日の「杜の都」のベースとなります。この街づくりは「一木一草、無駄なものなし」といわれる程に自給的な空間であり、暮らしに必要なものはすべて調達できたと言われるほどでした。また屋敷裏には竹が植えられ、多くの屋敷内では食卓に筍が上がった。
当時の日本は、寒冷化によって飢饉が頻繁に起きており、その度、エディブルガーデンに植えた「救荒植物」＝飢饉の際に食べることができ、飢えを凌ぐに足る野生植物が、多くの人々の命を救いました。
【仙台は茶葉の生産地　仙台は銘茶のふる里】400 余年前、茶人大名としても名を馳せた政宗公が領内に茶の樹を植えさせ、仙台和中・仙台府内の武家屋敷の生垣には茶葉を植栽することが奨励され、茶の産地とな理ました。茶作りに力を注いだ政宗が、「領地の茶はこれからもっとよくなり、奥州の宇治と呼ばれるようになる」 と記した書状も残されています。
明治 6 年の全国生産量で宮城は 4 位。江戸時代を通じ、大年寺山の丘陵地帯、若林城の専用茶畑、城下町の 7 割に及ぶ武家屋敷の生垣や、仙台以外の大身歴々の城下町にも茶畑が多く生産されており、明治の中頃まで、仙台市内を大きな籠を背負い茶葉を買い入れる仲買人が多く闊歩したとの記録もあります。仙台領のお土産といえば鮭が有名ですが、公卿や大名旗本とのお付き合いの際に持参した土産に、泉の古刹洞雲寺周辺の【山の寺のお茶】が送られた記録に残ります。若林城の北西 1 キロにあったのは親方様専用の茶葉の生産地、元茶畑として地名に残ります。しかし、明治時代に入ると、静岡をはじめとする生産力のある地のお茶に押され、次第に仙台を中心としたこの地域のお茶の生産量は減り、生産農家も姿を消していった。**出典：仙台市史通信　第 31 号**
文献には、500 種を超える「救荒植物」の利用法が記載されています。
有名なのは、米沢藩主上杉治憲が天明飢饉の時、藩医に命じて野草の食べ方を調べさせた「飯粮集」や、一関藩医・建部清庵が著した日本初の救荒書「民間備荒録」、そして、明治から大正期の農業指導者であった石川理紀之助による救荒食の調理法本「草木谷庵の手なべ」（前編・後編）です。これらの知識は、太平洋戦時中においても知識が盛んに再活用されていました。仙台の町中から少し離れると、田畑だったと思われる新興住宅地の片隅に、かつては「救荒植物」だったヒガンバナを、いまも目撃します。別名、曼珠沙華。
【杜の都を育み、城下町の繁栄を支えた四ツ谷用水】
広瀬川から梅田川に流れる本流から 3 本の支流、そして数多くの枝流に分かれ、城下町を縦横に走っていました。その総延長は 44km にも及んでいたのです。
【総括】
※　幕末から明治に掛け、大身の屋敷は新政府軍や県の施設となり、知行地取りの屋敷は学校等になった。
※　知行地取り多くの武家屋敷は留守居役が置かれ、知行地との参勤をしていたが、明治期に捨て置かれた。
※　捨て置かれた屋敷群は、鬱蒼と茂る屋敷林や竹藪に覆われた。
※　明治 37 年に天守台が開かれ、鬱蒼とした仙台を俯瞰で見る会を得た。
※　杜の都の定説化→仙台空襲による中心市街地の焦土化
※　広域な区画の切り売り、分筆と細分化による屋敷林の喪失　区画整理と街路樹制作で、杜の都の復活へ